

2013年度名古屋大学学生論文コンテスト

優秀賞 受賞

島崎藤村「初恋」をめぐってー背景・表現・解釈ー

文学部 河合 さやか

初恋 島崎藤村

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

わがこころなきためいきの
その髪の毛にかかるとき
たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

林檎島の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

出典『藤村全集 第一巻』（藤村全集刊行會、1922年）

1. はじめに

島崎藤村の「初恋」は恋のめざめと喜びを、情感豊かに歌い上げた抒情詩である。先日、塾講師としてこの作品を中学生に教えなければならなくなったとき、改めてこの詩を読み返し、参考書や指導用教材を読む中で、通説として通っている解釈に違和感を覚えた。そこで本論文ではこの詩の背景や表現に目を向けて、この詩をどう読むことができるのか考えたい。まずは従来解釈について国語教科書の参考書と吉田精一『藤村名詩鑑賞』をもとに分析し、次に「モデルの存在」、『伊勢物語・たけくらべ』との関連、「藤村が後に詩の一部を書き直したこと」という観点から検証を進める。

2. 書誌

「初恋」の初出は「文学界」明治二十九年十月号。総題は「一葉舟」であり、「四つの袖」

「逃げ水」などとともに「こひぐさ」の小題でくくられていた。のち明治三十年八月『若菜集』に独立した詩として収録された。その後『早春』(昭和十一年四月)では第三連が省略され、第四連結句「こひしけれ」が「うれしけれ」と改められている。

3. 従来解釈

3.1 現在の中学国語教科書

「初恋」は、優美な七五調のリズムや「初めての恋」という馴染みやすいテーマゆえに、長く人々に愛唱され親しまれてきた。また、文語定型詩という教授上わかりやすい詩の形式をもっており、文学史における重要度も高いことから、現在も国語の教材として多く用いられている。たとえば教育出版社の中学国語教科書「伝え合う言葉」は、三年生の詩の単元に「初恋」を取り上げている。そこでこの教科書の参考書等を見てみると、この詩の内容を「第一連：出会い、第二連：恋の始まり、第三連：恋の高まり、第四連：恋の成就」とであると解説していることがわかる。(図1, 2参照)

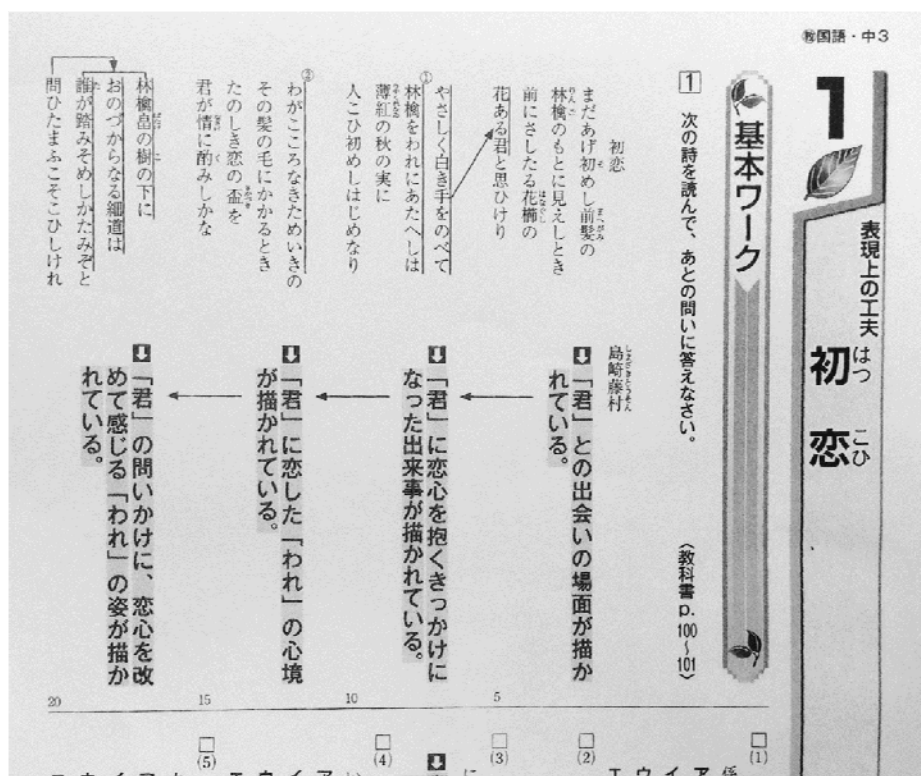


図1 『NEW BASIC』指導書 p.68 (学書)

要点のまとめ

「初恋」は、林檎の木の下で出会った少女との恋が成就してゆく様子を、初めて恋を知った少年の率直な感情をこめて書かれた詩。林檎に連想される甘酸っぱさ、みずみずしさの中に初恋の喜びが大胆に描かれている。

1 構成

第四連	第三連	第二連	第一連
恋の成就	恋の高まり	恋の始まり	出会い
・「おのづからなる細道」 踏み固まって細道ができるほど、二人は何度も林檎の木の下に通い合った。	・少年の「ためいき」 高まる恋心 ・その少年のためいきが、少女の髪にかかる。 二人は近く寄り添っている。	・少女が白い手をのぼして林檎をさし出す。 ↓ 少女に恋心を感じ始める。	・林檎の木のもと。 ・前髪に花櫛をさした少女と出会う。 ↓ 「花ある君」と感じる。

2 読解のポイント

- (1) 各連の情景をとらえ、少年の心情の変化を読み取る。
 (2) 七五調の文語定型詩という詩の形式をふまえて、言葉のリズムやその効果を捉える。

◎参考2ページ 詩の知識

図2 『中学必修テキスト』指導書 p.82 (文理)

3.2 吉田精一の解釈

上のような解釈が下敷きになっていると思われるのは、吉田精一の『藤村名詩鑑賞』である。

まづ第一聯は、初めてあつたときの恋人の印象を歌ってゐる。(p.24)

次に第二聯は前聯をうけておだやかにその詩情を展開してゐる。ここでは恋人の動作とそれによつて動かされた青年の感情とを述べてゐる。(p.26)

第三聯に入ると、詩調は急変して、恋を語り合つたのちのことになつてゐる。思ひあまつて包みきれずに打明けた恋心を、彼女は幸に受け入れたのである。(p.26)

第四聯は、一、二聯と三聯を統合して詩を結成する。…田園にめばえた可憐な純情の恋愛風景といふべきであらう。(p.28) (吉田、1954年) ※一部旧字を新字に改めた

この吉田の研究については、藤澤道朗などが論文で取り上げているほか、藪禎子も「藤村研究史」で、彼の研究は「今なお基本的なところで貴重な羅針盤となつてくれている」と述べている。(藪、1984年)「林檎の樹下で出会った二人の間に恋が芽生え、高まり、それを回想する」という吉田の解釈は、多くの研究・教授の下敷きになっていると言える。

4. 問題提起・仮説

しかし第一連を「出会い」とすると、二つ違和感が残る。一つ目は、この少年が“初めて

出会った少女”の前髪について〈まだあげ初めし〉であると見抜いたこと。もう一つは、第二連から第三連への経過が突飛すぎることである。第三連での距離感の変化はかなり唐突であり、描かれ方も随分と大人びている。この二つ目の違和感について、吉田は「四聯の詩では、第三聯でそれまでとは急激な変化をするのはふつうの作法である」（吉田、1954年）と述べている。しかしまた、のちに藤村が第三連を省いたことについては「この四行（※第三連のこと）が初恋より少し成長した感がある為かも知れない。…却つてすつきりとした観があるかも知れない」（同）とも述べており、自身も第三連の違和感を持っているようである。

二つの違和感について考えているうちに、私は主人公の二人がもともと幼馴染だったのではないかと考えるようになった。昨日まで髪を下ろしていた幼馴染の少女が、ある日突然髪を美しく結いあげてきたのだとしたら、一目見て〈まだあげ初めし前髪〉だと感じるはずである。また、第三連でのふたりの距離が近いことも、もともと遊び友達だったとすれば納得できる。そこで、「ふたりは第一連で出会ったのではなくもともと幼馴染であり、少女の変化によって少年がときめき、ふたりの関係も変わり始めたのではないか」という仮説のもと次からの検証を進めていく。

5. 検証

5.1 モデルの存在

「初恋」の少女にはモデルが存在すると言われており、何人かの女性が挙げられている。脇本陣の娘である大脇ゆふ、明治女学校教師時代の教え子である佐藤輔子らが有力だとされており、他には神戸の広瀬津祢などがいる。その中でも特に大脇ゆふは特に強い支持を得ており、前述の吉田のほか、「島崎藤村『初恋』・『千曲川旅情の歌』」の増淵恒吉・大河原忠蔵らが、彼女こそ「初恋」のモデルであると断定している。大脇ゆふ（勇）は藤村の隣家に住んでいた同い年の少女で、手習いのために藤村の父のもとへ通っていた。

藤村は自伝小説「ある婦人に与ふる手紙」（途中からに「幼き日」と改題、明治十五年五月～大正二年四月）の中で、「何時の間にか私はこの隣の家の娘と二人ぎり隠れるやうな場所を探すやうに成りました。私達は桑畠の間にある林檎の樹の下を歩き又は玄関から細長い廂風の小座敷を通り抜けて、上段の間の横手に坪庭の梨の見えるところへ行きました。（中略）有体に言へば、私は女といふものに初めて子供らしい情熱を感じました。私はお文さんを緊く抱締めたこともあります。」と記している。これは「私」が八歳の時のことで、同じ作品には、「私は八歳の昔に早や初恋を感じたほどの少年で」ともある。

（増淵・大河原、1967年）※この「お文さん」のモデルが大脇ゆふだとされている。

もともと、藤村の幼少期には、彼がいたとされる馬籠・妻籠に林檎の樹はまだなかったとされており、垣田時也「藤村詩考—初恋をめぐる—」にその詳細が研究されている。しかし現在の馬籠ではゆふを「藤村 初恋の人」として敬愛しているし、林檎に関する記述は旧約聖書から影響を受けた創作だと捉えてもなお、ゆふの存在が藤村の初恋体験に大きくかかわっ

ていたことは否定できないだろう。もっとも、ゆふとの初恋は八歳という幼い時のものであり、「初恋」での結い上げた髪型（おそらく桃割れという髪型）は、16,7歳くらいの少女の結い方であるから、完全にゆふとの恋を描いたものだと言い切ることもできない。



図3 初恋のモデルと言われている「おゆふ」
ブログ『音の楽しみ』「木曾漫歩1 馬籠宿」2009/10/13（2013/1/6 確認）

佐藤輔子は藤村と恋愛当時、彼の教え子でありさらに別に許嫁もあった、キリスト教信者の女性である。『若菜集』が生み出される直前に彼女は急逝し、その死と恋愛の思い出が『若菜集』が作られる要因となったと言われている。松原秀江は「藤村の「初恋」と伊勢物語」において佐藤がモデルであることを中心に述べている。それは「初恋」の詩全体が『伊勢物語』のさまざまなエピソードをベースにしていると論じたうえで、『伊勢物語』第六段に出てくる二条の後と佐藤輔子を重ね合わせた議論になっていた。たしかに、後でふれるように「初恋」と『伊勢物語』の関係性は指摘できるかもしれない。しかし「踏み」「問ひたまふ」などのごく短いありふれた単語によって、即座に『伊勢物語』第六段と一致させようとするのは強引なのではないかと思う。

また、大脇ゆふを始めとする複数の女性との恋が重複して語られているという説もあり、これは三好行雄や、『若菜集』の詞づかいと詩法・背景』を編集した浅井清らが主張している。彼らによると、藤村の初恋相手がゆふだったとしても、「ある婦人に与ふる手紙」によれば当時二人はまだ八歳。先ほど述べたよう鬼、髪を上げたり、第三連のような官能的な感情を抱くには早すぎる。そこで佐藤輔子や広瀬津祢との恋をミックスして、藤村の持っていた初恋へのイメージの集大成を作り上げたのではないかと論じている。

藤村の作品は小説をはじめとして自伝的なものが多いというが、そうだとでも過去の体験をそっくりそのまま描いていると考えるのは安直だろう。大脇ゆふとの恋を主軸に、成長してからの恋なども踏まえたうえで、林檎というモチーフを加えて「初恋」が作られたというのが一番しっくりくる。

5.2 『伊勢物語』『たけくらべ』との関連

私は、第一連一文め〈まだあげ初めし前髪の〉を読んだ時に、思わず『伊勢物語』を本歌取りしているのではないかと感じた。二十三段「筒井筒」に出てくる和歌「くらべこし ぶりわけ髪も 肩過ぎぬ 君ならずして たれかあぐべき」のことだ。この「筒井筒」は、惹かれあっていた幼馴染の男女が成長し、離れてからも互いを思いあっていて、ついには結婚することが描かれている。上に挙げた和歌は女性からの返歌であり、男性からの「筒井つの 井筒にかけし まろがたけ 過ぎにけらしな 妹見ざるまに」に答えるものである。「幼い頃僕たちはよく背比べしていたものだが、今では僕はすっかり背が高くなりました」という歌に対して、「私の髪もすっかり長くなりましたが、あなた以外のどなたのために髪を上げましょうか(=もう成人の儀式を行ってあなたと結婚できる歳なのですよ)」と返している。もし藤村がこの和歌を想定していたとしたら、「初恋」の男女も幼馴染だったと考えるのが自然なのではないか。

このような多作品からの影響について先行研究をみると、松原秀江、増淵恒吉・大河原忠蔵が『たけくらべ』の影響をうけているのではないかと指摘していた。

「まだあげ初めし前髪の」とは、…樋口一葉の『たけくらべ』(明治二十八年一月～二十九年一月)の第十五章の、数え年十四歳の少女美登利のさまを描いた「まだ結びこめぬ前髪の」の句を転用したもので。思春期にさしかかった少女のおもかげが余情として感受されるように思う。(増淵・大河原、1967年)

『文学界』を創刊した藤村は、『文学界』に発表される『たけくらべ』(明28・1～29・1)に「早くから注目し」、『文学界』の編集・経営にもあたった星野天知に、三月四日付書簡で「今月の「文学界」兄が枕頭にありと存候。(中略)一葉子の筆力ますます新しく、実におそろべき秀才と存候。」と書き送っていた。(松原、2011年)

たしかに、「まだ結びこめぬ前髪」の方が〈まだ上げそめし前髪〉と近く感じる。しかし『たけくらべ』という題名じたいが『伊勢物語』第二十三段に由来するものであるし、美登利と正太郎は近所に住む友達だった。主人公とヒロインが幼馴染であるという点に変わりはない。

5.3 作者による改変(「こひし」から「うれし」へ / 消された第三連)

書誌で示したように、藤村は昭和十一年『早春』でこの詩を改変している。第三連を削除し、第四連結句「こひしけれ」を「うれしけれ」と改めた。古語「こひし」はそもそも、時間的、空間的な距離があり、離れたところにあるものに対して心惹かれるさまを表す言葉だ。一方「うれし」にはそういった対象の制約はなく、単純に喜ばしさや愉快さを表すものである。つまり「問ひたまふこそこひしけれ」と言う場合には、この二人は今同じ時を過ごしているのではないことになる。初恋がすでに過去のものとなり、当時のことを回想していると捉えるのが自然だ。ところがこれが「問ひたまふこそうれしけれ」になると、目の前で自分に質問をしてくる少女に対して、少年がリアルタイムで喜びをかみしめている、ということ

になる。

さらに、第三連の削除について考えてみる。第三連「わがこころなきためいきの/その髪の毛にかかるとき/たのしき恋の盃を/君が情に酌みしかな」は、二人の距離の近さや、他の連に比べて大人っぽい表現から、他の連と比べて異質な部分である。つまり、この三連の有無と「こひし/うれし」の違いを考慮すると、改変前の詩と改変後の詩はそれぞれ、

前：第三連あり＋「こひしけれ」…大人になった主人公が過去の初恋を回想している

後：第三連なし＋「うれしけれ」…主人公の少年が現在進行中の初恋にときいめいている

というように詩全体として解釈することができる。一見した詩の印象は、改変前に比べて改変後の形の方が全体のバランスをきれいに取れており、「初恋」という題名にふさわしい初々しさであっさりまとめられている。どちらが正しいと言うことはできないし、藤村自身が日記などにこの改変について何か思うことを記したという研究もない以上、彼がどんなつもりでこのように改めたのかは想像することしかできない。しかし主人公たちの関係性について論理的に考えるならば、「二人は幼馴染」説は、改変後の詩では説得力が弱まるといえる。なぜならば、一行目の疑問が残るとはいえ、第三連の消去によって、この詩の思わせぶりの奥行きが薄まってしまい、無駄な前提条件をつけ足す必要が少なくなってしまうからである。

ところで、先行研究は『早春』における第三連の削除をめぐる、主にふたつの立場に分類できる。削除したことによって、「初恋」としてのバランスが整ったという肯定派と、第三連が持っていた官能的な響きの消失は、詩全体の奥行きへの損失になったという否定派である。前者の削除肯定側はこの詩を、初々しく清らかな慕情を描いた作品だといい、後者削除否定派はその奥に潜む、官能や性のめざめを描いた作品だという主張をしている傾向がみられる。前者を取っているのは、吉田精一、松原秀江、「若菜集（島崎藤村）」の伊藤信吉らである。前者を取ると言っても、吉田の解釈を引用しそのまま賛同している状態のものがほとんどである。一方後者には、三好行雄、藤澤道郎、増淵恒吉・大河原忠蔵がいるが、彼らは林檎のもつイメージや、第三連の展開の意義を強く主張している。

これらの解釈の違いは、主人公二人の関係の読みにも関係している。吉田精一を主とする前者では、出会いからはじまり、徐々に進んでいったふたりの恋物語として解釈しており、そこにアンバランスさを加える第三連は削除すべきだとしている。(4. 問題提起 仮説での引用を参照) 後者では、第三連の接近を根拠にふたりがもっと深い仲になっていた可能性を示唆する研究もあり、そのためにはじめから二人が知り合っていたはずだ、あるいはさまざまなモデルの集大成だという読みをしている。

6. 結論とまとめ

ある詩のよさを味わい自分なりに想像することと、その死の背景や構成から作者の意図を調べることはもちろん異なる。詩を解釈するということは、テキストそのものの自由な分析と、背景や筆者の意図の検証というふたつの側面があり、どちらをどれくらい重くとるかによって、その解釈文の色合いが変わってくるのだらうと、今回の調査で感じた。また、国語科で生徒に授業するという活動も、そういった解釈とは大きく違っている。授業として扱う

以上、教育のなかのひとつの素材としてその詩が扱われるべきだ。好きなように想像を膨らませたり、あるいはただ詩の周辺知識について調べたりするのではなく、ある種の意図をもって詩が解釈されるのは当然のことである。

それを踏まえたうえで、モデルの存在、『伊勢物語』『たけくらべ』との関連、作者によるのちの改変という三つの点から「初恋」を考えてきた。詩の解釈に「正解」を定められないし、詩とは作者の体験をそのまま描いたものだと言うこともできない。しかし、藤村の初恋体験に大きな影響を与えた大脇ゆふの存在や、「初恋」発表直前に連載されていた『たけくらべ』と類似する部分があることは、「初恋」の主人公たちが幼馴染だったのではないかという仮説を証明する十分な根拠となりうると思う。また、わざわざ本人が改変したにも関わらず、現在も改変前の詩がよく口ずさまれるのは、一見謎めいて見える第三連が入っていることによって、この詩の世界観に奥行きが生まれているからだろう。今回私が行った「幼馴染説」などの読みを可能にしているのは、この奥行きによるものだと思う。

参考文献

- 吉田精一『藤村名詩鑑賞』（河出書房、1954年）
- 藪禎子「藤村研究史」（関良一『島崎藤村 考証と試論』教育出版センター、1984年）
- 増淵恒吉・大河原忠蔵共著「島崎藤村『初恋』・『千曲川旅情の歌』（『国語教材研究講座 高等学校 現代国語』第二巻、有精堂、1967年）
- 松原秀江「藤村の「初恋」と伊勢物語」（『大手前大学論集（12）』2011年）
- 垣田時也「藤村詩考―初恋をめぐって」（『甲南女子大学研究紀要』創立20周年記念、1984年）
- 浅井清ら『『若菜集』の詞づかいと詩法・背景』（『解釈と鑑賞（23）』1958年）
- 水元精一郎「恋愛詩における発想の構造―島崎藤村『若菜集』論（二）―」（『山口大学文学会誌（41）』1990年）
- 青井成仁「島崎藤村「初恋」について」（『解釈（46）』2000年）
- 藤岡 加世子「『若菜集』の実り、恋愛詩の展開」（『国文白百合（43）』2012年）
- 高見 よ志子「詩の鑑賞の一方法としてのノート作業：島崎藤村「初恋」の授業をめぐって」（『金沢大学語学・文学研究（10）』1980年）
- 伊藤整ほか『日本現代文学全集（10）樋口一葉集』（講談社、1962年）
- 井出孫六ほか『群像 日本の作家4 島崎藤村』（小学館、1992年）
- 三好行雄『シンポジウム日本文学15 島崎藤村』（学生社、1977年）
- 下山嬢子『日本の作家100人 人と文学 島崎藤村』（勉誠出版、2004年）
- ブログ『音の楽しみ』「木曾漫歩1 馬籠宿」2009/10/13（2013/1/6 確認）
- <http://oto-no-tanoshimi.seesaa.net/article/130151030.html>